

**取組実績の概要** 【2ページ以内】

本プログラムの実施により、本学における交換留学においてアジア地域への派遣が実施前の25%から32%へと伸長し、そのうち実施前は中国・韓国・台湾への留学が90%の割合であったが、ASEANへの留学が49%を占めるまでとなった。また受入においてはアジア地域からの受入のうち、ASEANからの受入が実施前の10.6%から12.5%へと伸長した。このようにASEANとの間で学生派遣および受入が急速に進み、学生構成の多様化およびバランスのよい国際化を実現することができた。

**1. 国際PBL(Project/Problem-Based Learning)を基軸とした学び合いのプログラム**

国際PBLを基軸とした本プログラムは、異文化の状況における問題把握能力と本学学生とASEANの学生との協働による独創的な課題解決能力を涵養することを目指し、留学前学習（事前指導科目）、留学、そして留学後学習（事後指導科目）という1年半（3セメスター）に渡る一連の流れの中で教育の内実化をはかることができた。

① 本学における国際PBL科目の展開については、派遣学生と受入学生に加え、前年度派遣学生が共に学びあい協働できる国際PBL科目や、シミュレーション&ゲーミングに関わる科目を開設し、各国の文化、政治、経済、およびその他の社会問題を日本の事象と比べながら理解を深めることができた。異なる文化を持つ学生達が、PBLを通じた協同作業によりチームの力によって課題に立ち向かい、課題を解決する力を育むことができた。また前者の科目においては、前年度派遣学生も受講することによって、派遣国において国際PBLを実践してきた先輩として国際的なリーダーシップを発揮できる科目となった。

この国際PBL科目では、思考ミックスやエクスポータビリティの涵養のため、目標とする人材に必要な以下の3つの能力を設定するとともに、多学術分野・多文化における学習のアウトプットとしてのグループ発表やグループ報告書の評価軸とすることで、人材育成目標に則った学習を促した。

**【3つの能力】**

1) 異文化課題把握力（文化が異なる国の事例であっても、その状況や課題を把握できているかどうか）、2) 論理性（課題把握から解決策提言までの議論が論理的であり、根拠を示す能力や議論を進める能力があるかどうか）、3)（異文化課題把握力に基づいた）独創性（日本の価値観や政策とともに東南アジアなどの社会・文化的背景を踏まえた上で、独創的な提言ができているかどうか）

派遣学生に対しては、初級タイ語・インドネシア語、東南アジアの宗教などの事前指導科目を開講することにより、留学に必要な英語力だけでなく、東南アジアという地域の言語文化への理解を促し、多国間を比較・分析する能力を高め、国際的な場面における適応力を身につけることができた。

② 派遣先大学において、本学の学生は国際PBL科目を中心に派遣先大学の正規開講科目を受講した。国際PBL科目については、教育方法として認識せずPBLに取り組んでいる協定校もあったが、本学よりPBLの意義や内容を伝え共有するとともに、シラバスをもとに派遣先大学との協議を重ね国際PBL科目の精選を行った上で、本学学生への履修指導を行うことで、現地の社会問題などに関する協定校での異文化環境下における協働という国際PBLを通じた学習を達成できた。

**2. 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備**

① 日本での研究・教育経験が豊富な外国人教員や、海外との共同研究などの異文化での協働経験が豊富な教員3名をプログラム担当として任用し、事前指導科目・事後指導科目の担当、派遣学生と受入学生へのアカデミックアドバイス、および授業内外における派遣学生と受入学生との交流を促進するコーディネータの役割を担った。またタイおよびインドネシアに日本に精通した各2名の現地コーディネータを配置し、英語および現地語によって、協定校との調整、日本からの派遣学生支援、日本への派遣が決まった現地学生支援を行うなど、学生が留学しやすい環境を整えた。

② 受入学生への支援として、国際寮や借り上げ宿舎を提供し、本学独自の奨学金の給付を実施した。またホームビジットやホームステイにおいて日本の家庭と交流を図り、学内では得られない多世代との交流や日本の日常的な家庭生活にふれる機会をつくった。

**3. オンデマンド講義・サテライト講義の整備**

- ① 協定校であるタイ・タマサート大学国際学部とVOD (Video-On-Demand) を利用した講義を実施した。本VOD講義は協定校との議論に基づき、単なる動画視聴という受け身ではなく、問題提起に繋がる動画の視聴・グループでの問題解決へ向けた対策に関するグループディスカッション・問題解決の一例としての日本の事例に関する動画の視聴と、協定校の教員や事例という教育資源をアクティブ・ラーニングに活かす教育である。本学教員と協定校教員と連携をはかりつつ、VODを組み込むことによって、協定校のみでは提供できなかった様々なテーマについて、アクティブ・ラーニングを通じて学ぶための授業内容の拡張を図ることができた。今後、本プログラム参加学生の事後講義や、後継プログラム参加学生への事前科目としての提供も可能となった。
- ② サテライト講義についても、VOD講義と同様のプラットフォームを利用し実施できる準備が整っており、授業の時間を協定校とすり合わせることで、リアルタイムによる授業交換を実施することができる。

#### 4. 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

- ① 構想調書に示した共同研究および大学院教育においてすでに緊密な関係をもつ5連携大学に加え、新たな大学からも本事業参加の要請があり、タイおよびインドネシアの6大学と学生交換協定を締結し、学士課程での連携をはかることができた。タイおよびインドネシアといった成長著しい国での学びは、本学学生にも新しい世界へ踏み出すチャレンジングな機会となるとともに、ASEAN諸国大学との関係を深め学生交換を重ねることでバランスのよい国際化が実現した。また学内では、本プログラムの受入学生などによって、ASEANの文化にふれる機会やイスラムを知る・体験する交流企画「DISCOVER Islam」が開催されるなど、キャンパスにおける相互理解や交流が深化した。さらに平成29年度には全学を対象とした海外留学プログラムにおいてASEANを派遣先とした新たな短期プログラムが開設され、定員を大きく上回る応募があるなど、大きな波及効果があった。
- ② 本事業の広報として、日本語、英語、タイ語、インドネシア語の4カ国語によるウェブページを公開し、本事業における本学の取組の成果を社会に発信した。また、本学を卒業した派遣学生や過年度受入学生のインタビューも多言語で掲載し、本プログラムへの参加が、その後の進路・就職といったキャリア形成に深く結びついたことも示した。事業開始時のキックオフミーティングに加えて、事業の中間総括として協定校より教員を招いたPBLシンポジウムを実施することにより、成果を公表・共有するとともに、シンポジウム登壇者との協議を通じて本事業の成果発信としての国際PBLの理論・取り組みを発信する電子書籍をSpringer社より出版することが決まった（現在編集中）。

#### 5. 補助期間終了後の展開について

本事業の補助期間終了後については、連携大学との信頼関係の積み重ねや学生のASEANへの留学志向など、これまでの本事業における到達点を踏まえ、「ASEANを舞台とした多様性の中で、留学前学習・留学・留学後学習に至る一連のプログラムを通じて、ASEANや日本に関する問題意識を持ち、受入留学生と共に議論を重ね、学び合いを深める中で解決策を提案することができる柔軟な思考をもつ学生を育てる」プログラムとして、現行のプログラムをほぼ踏襲する形で、平成30年度より「ASEANで学ぶ国際PBLプログラム」として実施することとした。また連携大学6大学すべてと協定を更新した。また、上記の短期プログラムの実施や、さらなる学部間の教育協力について連携大学より打診があるなど、本プログラムを基盤としたAIMS参加大学との間での学士課程連携を発展させる土台となっている。

今後は、本学が採択されている文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業において「国際連携の上に立つアクティブ・ラーニングの実践」として大学独自のプログラムとして引き続き維持し、ASEANとの連携を積極的に進めていく。

#### 【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	25人	0人	31人	26人	36人	31人	36人	36人	128人	93人
実績	0人	0人	20人	5人	25人	13人	23人	23人	23人	26人	91人	67人

※AIMSリスト掲載大学の変更に伴う計画の変更がある場合は、変更後の交流学生数を記載している。

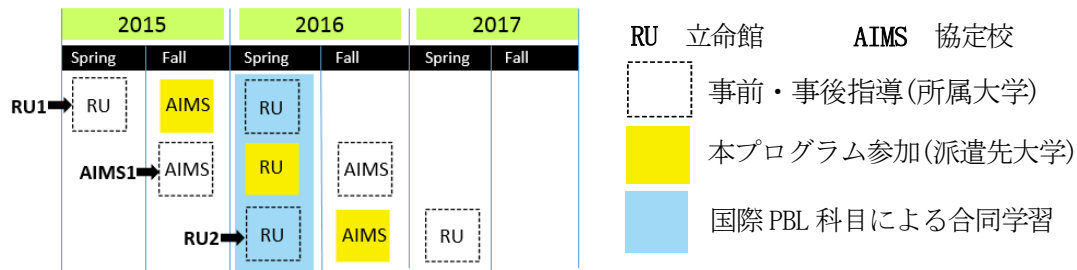
## 特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

## 1. 国際PBL科目を通じた日本とASEAN学生の合同学習

派遣学生と受入学生に加え、前年度派遣学生が共に学ぶ国際PBL科目（下図参照）において、各国の文化、政治、経済およびその他の社会問題を日本の事象と比べながら、専門講義の理解・調査・集団議論・政策提言という一連の協同作業を通じて、チームの力によって課題を解決する力を養成した。また、国際PBL科目である「国際PBLセミナー」ではビジネスや文化、計画理論を専門とする複数教員が担当することで、多学問による異なる思考に基づいて学ぶことで思考ミックスの能力の育成とともに、他国との比較を通じた母国の特徴を踏まえたエクスポータビリティを涵養できるようにした。

【国際PBL科目で取り上げたテーマの一例】

- ・ 日本の宗教や伝統を題材とし、イスラム教、カトリック教や上座仏教等との相対化と再発見
- ・ 日本の文化財保存と観光を題材とし、財政難や技術不足に悩む途上国の文化遺産保全の改善政策を提案
- ・ エクスポータビリティ涵養を目指した、協同による日本製品の海外輸出へ向けたビジネスモデルの提案



## 2. グローバルな進路・就職へ

本プログラムにより、発見した課題を個人ではなくグループで解決を目指す力や、不自由さやトラブルを乗り越えるタフさを身につけた学生達は、グローバルな世界へと飛び立っている。卒業生50名のうち、40%を越える学生がASEANにも積極的に事業展開をしている製造業や流通業に就職し、10%が大学院に進学して経営学や東南アジア研究を進めている。また休学してインドネシアでの起業にチャレンジする学生も出るなど、それぞれの進路においても、イノベータ・マインドが発揮されている。

## 3. 正課外における学び合いや交流の広がり

- ① 派遣学生と受入学生とがインドネシア語／タイ語と日本語のLanguage Exchangeを自主的に行った。また受入学生からは断食明けの料理を、派遣学生からは留学生でも作りやすい料理を用意してお互いに説明しつつ楽しむなど、学生らしいアプローチで語学習得や交流が進んだ。
- ② 全学の留学生を支援する学生団体TISAによる到着時サポートや交流企画に加え、派遣学生がAIMSサポーターとして生活サポートや昼食会、花見などの企画を行い、プログラム内外での交流が進んだ。
- ③ 受入学生に提供したシェアタイプの借上げ宿舎では、プログラム外の日本人学生とも共に暮らすことで、生活の場を通じた交流も広がった。
- ④ 茨木市国際親善都市協会の協力のもと、受入学生が茨木市民の家庭に1日訪問し、日本の日常生活を体験する「ホームビジット」を実施した。また初芝立命館中学校・高等学校（大阪府堺市）の協力のもと、2泊3日の「ホームステイ」を実施し、堺市の刃物産業の現場をご家庭の方と一緒に見学するなど、大学での学習や生活では経験できない日本の家庭生活や産業の現場にふれる機会となった。



AIMSサポーターによる花見企画



シェアタイプ宿舎での共同生活



ホームステイ先での地場産業見学